

福祉車両の乗降 記者が体験

開発 生の声で後押し

ボランティアスタッフによる福祉車両での送迎サービスを手掛ける NPO 法人「豊田ハンディキャブの会」がトヨタ自動車社員を対象にした体験会を開いている。障害者や高齢者向け施設の送迎などに使われる福祉車両の開発に利用者の声を生かしてもらうのが狙い。記者も参加し、車いすでののりおりを体験した。十七日に名鉄豊田市駅前で開かれた体験会には販売店の協力でセダン一台とミニバン四台、計五台の福祉車両が並び、トヨタの社員二十四人が体験した。乗車体験として、ミニバンの後部ドアのスロープから乗せてもらう。車いすに座ると、参加者の男性社員が販売店の担当者の手ほどきで、スロープを下っていかないよう支えるベルトを車いすに取り付けてくれた。男性社員が車いすを押すと「重いっ」。そのひと言が腹と胸に響く。一五キロの車いすと合わせると、九十キロを超える計算になる。男性でも重労働だ。すかさず、販売店の担当者がベルトの電動巻き取り装置のスイッチを入れてくれた。車いすはスルスルと車内へ。機械のありがたみを感じたが、担当者は「電動巻き取り装置は有料のオプションです」と申し訳なさそうに教えてくれた。別の車両で、車いすごと持ち上げて乗降車する電動リフトも体験した。スイッチを押すとすぐに作動するため、「動かしますよ」「びっくりしないでくださいね」と NPO の担当者。この声掛けのおかげで、恐怖心なく利用できた。介助側も体験してみた。別の参加者が乗った車いすを、ミニバンの車内に乗せた。片手でリモコンを持ち、もう一方の手は車イスにそえるだけ。指先一つで操作できる。装置がない車両だと、乗り降りさせるだけでヘトヘトになるだろう。体験会後にはハンディキャブの会を利用する障害者五人も交えて意見交換の時間があった。トヨタ社員からは「スロープの角度や幅が少し変わるだけで、利便性や安心感が大きく変わる」「利用者、介護者、開発者の三者の意見交換が重要だと感じた」などの意見が出された。